

マネジメント情報

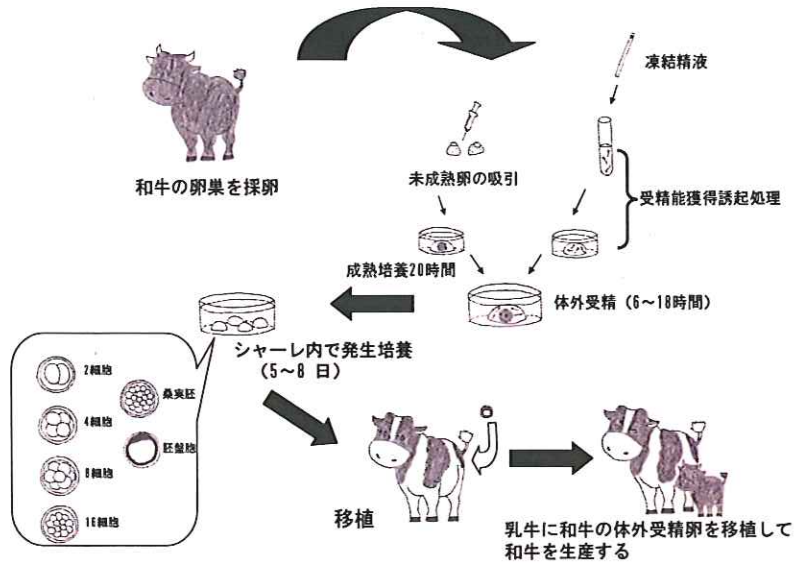
※ ドイツ・オーストリア研修_Vol.2

今回の研修の一番の目的であるウィーン大学のDr. Urban Besenfelder の牛の卵管を使った体外受精卵の作出です。

一般的な体外受精卵の作出の流れは下図のようになります。

わが国における体外受精技術の利用方法

乳牛から肉牛を生産する



ウシの体外受精の概要(原図: 矢崎)

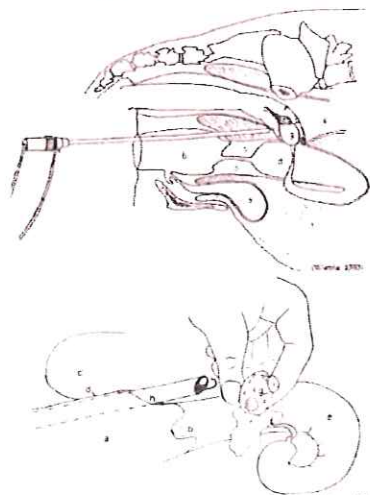
今回の研修はシャーレ内での発生培養を牛の卵管で行うというものです。

5年前位からこの方法は知っていましたが、企業秘密?とかで教えてくれる先生が見つからなかったのですが、教えてくれる先生がオーストリアのウィーン大学に在るということで行ってきました。図にある発生培養は培養器の中で行われますが、手技や管理がとても難しく正常な受精卵ができるのは一般的には20-40%です。

この発生率を改善させるためにこの技術(受精卵の卵管での培養)が開発されました。

下図及び写真のように内視鏡下で卵管に移植します。

Endoscopy via the vaginal route



Dr. Urban Besenfelder は簡単にできると言っていました、とても簡単にはできそうにはないような印象でした。

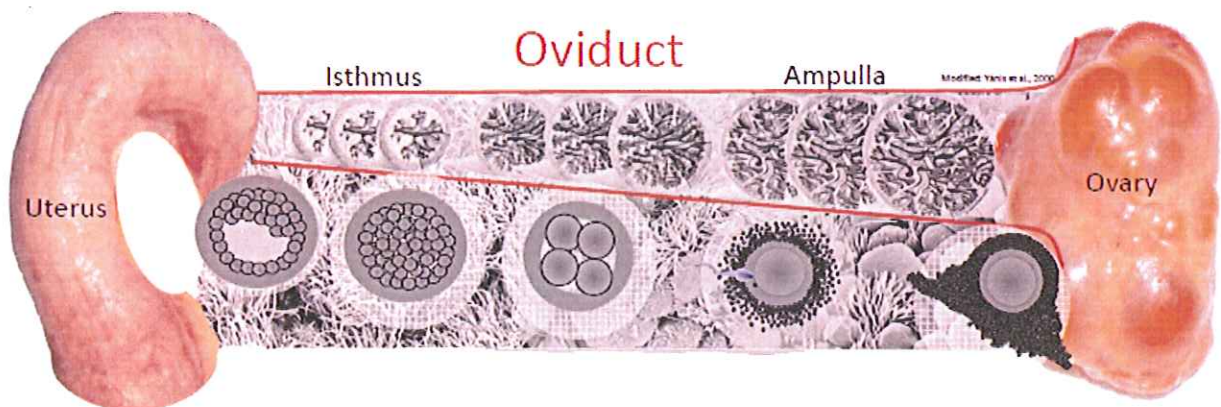
今回の研修で改めて感じたことがあります。今まであまり聞くことのなかった受精がおこなわれ受精卵が発育する卵管の存在でした。

通常、発情がきて人工授精をして排卵があり 30 日前後で妊娠鑑定をして受胎した、しなかったということで繁殖ということが完結したように思いがちですが、その間に卵管で正常に受精卵が発育しほぼ 7 日目に子宮に下りてきて着床し妊娠が成立するわけです。

受精卵の仕事をしてわかったことがあるのですが、採卵をした時に正常卵の他に未受精卵や変性卵が回収されます。

良い発情がきて授精をしたら単純に妊娠しそうですが、卵巢と子宮の間に卵管の存在があるわけです。その卵管で受精卵の発育があり、その過程で正常に発育した受精卵だけが妊娠する可能性があり、その後子宮の中で正常に生き続ける受精卵が胎児になり 280 日を経過して子牛として生まれてくるわけです。

当たり前の話ですが忘れかけていたことを再発見した研修でした。



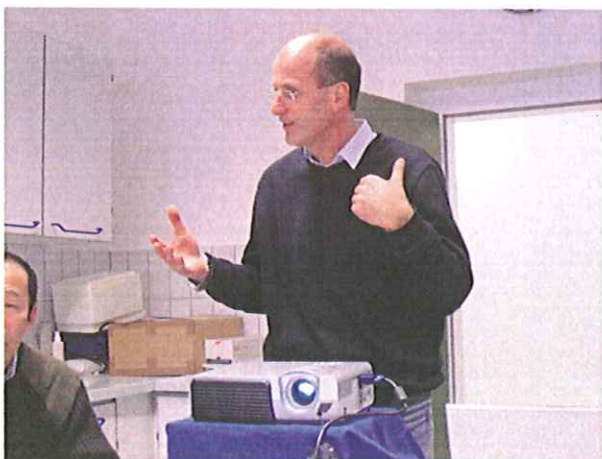
子宮



卵管



卵巢



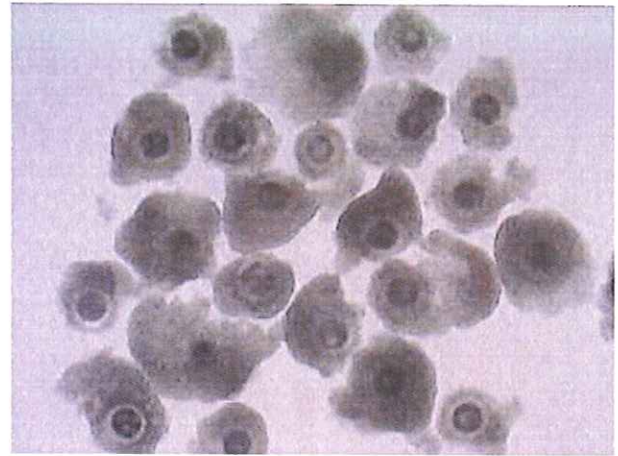
<Dr. Urban Besenfelder>



<研修の様子>



<今回の参加者とウィーン大学の先生>

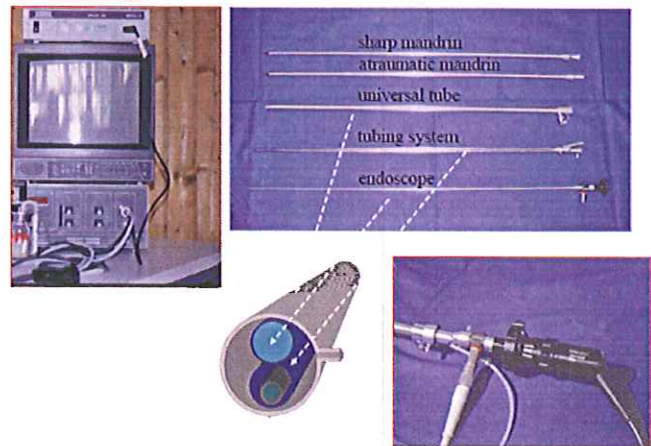


卵子(0.1mm)



<卵管にチューブを挿入するイメージ>

Endoscopy set



<内視鏡のセット>

-
- ・西越さんが無事に医師国家試験に合格しました。昨日3/19が合格発表の日で会社に「桜の花が満開に咲きました」と連絡がありました。
H20年8月にTHMSを退職して10月に旭川医大の2年生後期に編入し、あっという間の4年半でした。
今後は以前紹介しましたように室蘭の日鋼記念病院に就職し消化器外科のお医者さんとしての人生がはじまります。
合格前に旭川通信という名の近況報告が届いていましたので読んでください。